

横浜市小学校社会科研究会

3 学年部会

## 研修会記録

第 7 号

令和4年 1月 11日

横浜市小学校教育研究会

会長 徳江 武司

横浜市小学校社会科研究会

会長 加藤 和之

同 学年部長 岡村 伸一郎

【提案日時】

12月 7日 (水)

提案 能登 清仁 先生 (阿久和小)

【会 場】

横浜市立 阿久和小学校

司会 小森 竜也 先生 (汐見台小)

記録 栗飯原 里子 先生 (大岡小)

### 1 提案内容 単元名

単元名「横浜市の移り変わり ～阿久和団地からみる横浜～」

### 2 提案者より

阿久和小学校の近くにあり、クラスの中に実際に住んでいる児童もいる「阿久和団地」であり、子どもたちの生活と結びつく材になっていた。前時では、阿久和小の児童数やまちの人口が減っている事実と、新たな団地を建設している事実をもとに、本気の学習問題を「新しく建てかえている団地は、どんなことを大切にしているのだろうか。」と設定した。そして、役所や地域住民の思いを踏まえながら、これからのまちづくりに大切なことを考えられるようにした。

この実践を通し、①社会的事象の意味に迫る本時になっていたか、②資料の精選と提示のタイミングについて参観者のみなさんと考えたい。

#### 視点①

##### ○単元構想について

- ・「阿久和団地」を教材化することで、材が子どもたちにとって身近なものになっていた。本時の資料で登場した用語を先に児童に提示しておくことで、より取り組みやすくなり、読みとりの時間を減らすことができる。
- ・児童はこれまでの学びの経験をいかし、資料を読みこんだり、掲示物を見ながら考えたりすることができていた。
- ・「建て替えにあたって大切にしていること」を問う本気の学習問題は、3年生の子どもたちにとって少し難しいのではないか。前時の事実をもとに本時の問題をつくる際「なぜ住む人は減っているのに、新しい団地を建てているのか。」とした方が、児童も自分の考えをもちやすかったかもしれない。

## 視点②

### ○協働的な学びに向けて

- 資料の前後で児童の思考が「つくり」から「思い」へと変容しており、本時目標に迫るために資料が有効だった。一方で、資料を分けて提示する、あるいは文字をなくして写真のみで提示する、など資料の見せ方を工夫すると、より児童の思考を働かせることができたのではないかと。
- 協働的に考えていくためには、「交流の場」のイメージをより具体的にする必要があった。そのために、それぞれが思う「交流の場」の具体をあげたり、写真の資料を補足で出したりする手立ても考えられた。
- 資料は児童の「ぼくは家族を大事にしている（と思う）。」や「家族がいなくなると人口が減るといっていて……」をきっかけに出すこともできた。
- 子どもが考えている立場を明確にすることで、子どもたちにとっての分かりやすさ、切実感が高まり、子どもたち同士の対話が増えてくるのではないかと。

### <講師の先生より>

多摩川大学大学院教育学科 准教授 梅田 比奈子 先生

10人の学級だからこそ、10人に合う一般的ではない活動（例えば、地図や写真を囲んで10人で車座になるなど）があった方がよかった。事実として、建て替えは計画的なものではないか。Tさんの心情に寄り添うだけでは、言っていることがブレてしまったり、分かっている子だけで進んでいったりしてしまう。シンプルに、子どものストーリー（予想→見たこと→思っていること）で考えるとよい。

西部学校教育事務所 主任指導主事 秦 秀治 先生

ここに暮らしている子どもたちの視点が不足していた。子どもたちは阿久和をどのようなまちだと感じていて、どんな団地だと捉えているのか。コロナ禍スタート世代だからこそその捉えがあるのではないかと、生活経験の掘り起こしが必要である。また、資料は写真の資料でもよかった。3年生として根拠をもって話す練習をしていけるとよい。

文責 北沢 宏 (間門小学校)